

## 夫婦と治療者の「間（あいだ）」の創出と活用

八巻 秀

## I はじめに

「八巻さん、今回のあなたの発表を今度、『誌上コンサルテーション』に出してね」

本学会の第21回大会のシンポジウムが始まる直前、会場で偶然隣に座られた某先生から、いきなりこんな声をかけられた。偶然隣にいたから声をかけたのか、座る前からそう思われていたのか、今さら知るよしもない。きちんとしたスーパーヴァイズも受けずに現在の臨床活動を行っている自らの現状を考えると、心理臨床の神様(?)から某先生の声を通して「あなたの臨床に対して、他の先生方の意見をしっかり聴き、学びなさい」というメッセージが与えられたのかもしれない……などと自分勝手な想像をしつつ、筆者にとって大きな「学び」となった一つの事例をこの場をお借りしてご紹介させていただき、コメンテーターの先生方を含めた皆様からのご意見をいただけることで、「さらなる学び」の機会となればと思う。

以下、提示する事例は、筆者が当時週1日勤務していた診療所（心療内科）と通常勤務していた開業のカウンセリング機関との両方にわたって担当したケースである。

## II 事例

アナフィラキシー・ショック症状をもつ女性との夫婦面接を併行させた心理療法過程。

## 1. 事例の概要

- 1) IP: A子（初診時40歳、女性、専業主婦）
- 2) 主訴: 慢性蕁麻疹、意識消失発作、家族関

2004年11月17日受理

“The Space Between” a Married Couple and Therapist: Its formation and application

秋田大学教育文化学部, Shuu Yamaki: Faculty of Education and Human Studies Akita University

係（夫婦と親族）の問題

## 3) 来談までの経過

筆者（以下Th）が、当時週1回勤務していたC診療所のD医師（心療内科医）から紹介される（X年5月）。D医師からの紹介状には、次のように記載されていた。「原因不明の蕁麻疹が先行するショック（アナフィラキシー・ショック）で、しばしば救急でE病院（アレルギー専門病院）に受診している患者さんです。何か心因的なものが関係しているのではないかということで、E病院長よりC診療所に紹介された患者さんですが、当初は心因性のもはわかりませんでした。最近、姑（A子の話からすると、自己愛人格障害と思われます）との関係で悩み、義姉やご主人と口論した際、解離性症状（急性ストレス障害）が起きるようになりました（X年4月上旬）。このため、ご本人がカウンセリングを希望されました。アナフィラキシー・ショックと急性ストレス障害との関係については、まだ結論が出ていません」

当初は、C診療所でD医師の診察（月に1回）と併行して個人面接（X年5月下旬に初回面接）を行っていたが、夫婦面接も併用していくことが必要とThが判断し、1カ月後のX年6月にはThが勤務していた開業カウンセリング機関であるFセンターで、個人面接とともに夫婦面接を併行した構造で実施していくことになった。D医師の診療はC診療所において継続された。

## 4) 事例の状況

①生活史・現病歴:（年齢はインタビュー時）

地方都市であるG市で、5人兄弟（男1人、女4人）の末っ子として生まれた。父親（83歳）は、まわりが苦勞するくらいわがままな性格で、若い頃から頑固で厳しく、怒ると歯止めがきかない人だった。母親（73歳）は、子どものことを

第一に考えるような自己犠牲的精神が強い(たとえば、父親が子どもを殴ろうとすると、身代わりになって自分が殴られる)人だった。A子は幼い頃から「感受性の強い子」であったが、体が弱く病気がちだったこともあって、子どもの頃は「他の兄弟に比べたら自由だった」とのこと。父親は子どもに支配的で厳しく、A子以外の他の兄弟は、入学する高校まで父親に決められていた。A子が幼い頃、父親に子ども(特に長男)が反抗すると、その影響で父親が母親に暴力をふるうことがよくあった。「その情景は今でも覚えている。その時は怖くて涙も出なかった」とA子は後に語っている。

A子が14歳の頃から蕁麻疹が出現し、17歳の頃より頻回に認めるようになった。この時期は水泳中、寒冷時、発汗時、チーズを食べた時などに多く見られた。18歳の頃から蕁麻疹出現時に意識消失発作が現れるようになり、1年に数回意識の消失があった。24歳の時、地元のH大学病院を受診。一般検査では特に異常がなく、心理テストでは神経症的傾向、高度不安、抑うつ傾向が見られた。大学病院にて絶食療法、自律訓練法など開始し、抗アレルギー薬などを併用したところ蕁麻疹や発作は減少した。

X-3年(A子が36歳)に現在の夫Bと結婚し妊娠するが、それまでの経過から妊娠継続は困難と判断し、同年8月に人工中絶。同年10月より夫Bの仕事の関係で現在の住まいに転居し、アレルギー外来のあるE病院を紹介され治療を続けるが、大きな改善は見られず。心因性も考えられるとC診療所の心療内科医D医師に紹介される。

## ②家族環境

現在A子は夫B(41歳、専門職)と二人暮らし。子どもはいない。A子の両親は、地元G市で兄(長男50歳)夫婦と一緒に暮らしている。夫Bの兄弟は、妹が二人(35歳と39歳ともに既婚。39歳の妹はA子の中学時代の同級生)。夫B側の父親はBが9歳の時に病死。母親(66歳)は首都圏近郊のI市で一人暮らし。母親は気性が激しく、自己中心的な性格。夫の家系は気性の激しい性格の人が多いとのこと(A子の報告)。

## ③心理テスト(TEGとCMIとYG性格テスト)

ト) : (X年6月実施)

A子の結果は、TEG(CP=2, NP=15, A=12, FC=12, AC=5), CMIの領域はⅡ, YG性格テストはC型。

夫Bも同時期に実施。夫の結果は、TEG(CP=8, NP=6, A=14, FC=7, AC=4), CMIの領域はⅠ, YGはC型。

## 2. 心理臨床過程

### 1) 援助の枠組み

当初はC診療所で約2週に1回の個人面接(D医師には月1回の受診)を行っていたが、C診療所でのThの予約がいっぱいで月1回の面接間隔になってしまうこと、また夫婦面接の必要性もあることなどから、面接開始1カ月後にはFセンターに場所を移して面接することになった。約2週に1回のA子との個人面接とともに、途中から月1回~2週に1回の夫婦面接が加わる形となった。

### 2) 事例の経過(以下、「」はA子や夫Bなどの言葉。〈〉はThの言葉。[ ]はThの内省や思い)

#### 【第1期】C診療所での個人面接

##### #1(X年5月)~#3(X年6月)

A子は、髪はショートカットで清楚な雰囲気。ゆっくりと控えめな口調で話す感じの女性。C診療所での3回の面接において、現病歴などとともに約1カ月前に起こったショック発作のきっかけとなった、義母を含めた夫側の親族とのトラブルについて聞く(この間に心理テスト実施)。最初A子は「結婚してからアレルギーショックが強くなりました。親族との出来事を他の人に初めて話します。でも、このこととショック症状とが直接関係あるのかどうかわかりませんが……」と本人がカウンセリングを希望しているながらも、実際にカウンセリングを受け続けることには少々懐疑的な抵抗感のある感じを持っている様子であった。しかし、親族とのトラブルについてThが尋ねると、そのことについて今まで溜めてきたものを一気に吐き出すように話し始めていった。トラブルの内容は、義母と義姉との仲が悪い状況をA子が何とかしようと仲介役をしているうちに、いつの間にかA子が悪者役になってしまったという話で

あった。特に義母から「おまえが一番悪い！」と強く責められるようになったとのこと。A子は「一時は主人からも責められるようになってしまって……何が正しいのか分からなくなった。つらくて泣いているうちに意識がなくなって、ふと気づくと部屋の隅にうずくまったりしていた」とパニック時のことを語った。A子が一つ一つ言葉を選び、丁寧にこれまでの出来事を分かりやすく話している様子を見ながら、ThはA子に対して「自然に自分のことを語れる、「語り」のうまい人だな」という印象を持った。

C診療所での3回の面接の後、ThはこのA子の状況に対して「A子は、夫B方の親族（J家）の問題を解決しようと仲介役として機能しようとしてきたが、一人でその機能を抱えることの限界がきたのではないかと。このA子の症状が起こる要因の一部分は“J家の問題に巻き込まれてしまった結果”かもしれない」というある程度の仮説を立てた。さらに、夫BもA子の治療に協力的であるという様子（C診療所でのA子の診察には、夫Bが必ず同伴していた）であることから、「A子にとって夫Bが支えになっている可能性は十分にありそう。まずは普段の夫婦間コミュニケーションがどのようになっているのかをしてみる必要があるかも？」と考え、ThからA子さんのカウンセリングにおいてご主人の協力も必要だと思えます」と述べて、個人面接とともに夫婦面接も併行して実施していくことを提案する。結局「J家の親族の人たちとつき合っていくのは難しいが、主人とはうまくやっていきたい」と希望するA子の思いとも一致したので、隔週で面接が可能なFセンターに移って個人面接とともに夫婦面接も始めることになった。

【第2期】Fセンターでの個人面接から夫婦面接併用へ

#4（X年6月）～#19（X+1年2月）

Fセンターでの初回（#4）は、A子一人で来所。夫Bの性格についてが話題の中心になる。「主人は、根本的な何か欠けているように思うんです」などと述べ、夫Bの性格や価値観とのギャップに結婚してからずっとA子が悩んできたことなどが語られた。

X年8月にFセンターで初めての夫婦面接（#6）となる。夫Bはギロツとした目つきで背も高く大柄でやせ形の体格。いきなり「妻はお盆には私の実家には行かないと言っておりますが、その行かない理由を私の母にはどう伝えればよいのでしょうか？」などと単刀直入に話してくる。それを聞いているA子は黙ってうつむいている。Thが（夫Bの雰囲気になんか圧倒されながらも）〈奥さんはどう思われますか？〉とA子に尋ねると、A子は顔を上げて「どう伝えればいいのか……どうしたらいいんでしょうか？」とThに訴えるように返してくる。Thは「ご主人は現時点ではどう思っておられるのですか？」とふると「私は『家内が病気で行けない』と母にはそのまま言おうと考えているのですが、妻が反対するのです」「そんな言い方したら、また私が責められてしまう……先生そうですね？」くう～ん。ご主人はどのように思います？」「そうかな？ それは家内の考え過ぎだと思いますよ」「そんなこと……ないわ」……といったThをはさんでの夫婦間交流が繰り返し広がられていった。それらの交流をThはじっくりと観察していくよう心がけていった。初回の夫婦面接の印象は、「口数は多くないが、話しぶりからは非常に割り切って論理的に物事を考える夫B」と「語りはうまいが、おとなしく情緒的な繊細さを持つがゆえに葛藤気味の妻（A子）」という対称的な性格の夫婦であった。それゆえ「夫婦の意見対立が平行線のままで、それに折り合いをつけていくような夫婦間コミュニケーションが展開しにくい状況が、結婚生活の中でずっと続けられていたのではないかとThには感じられた。

その後の夫婦面接では途中、夫Bの昔の恋人が突然現れ、示談金を要求してくるといったA子曰く「交通事故のような」トラブルがあったり（#11）、A子の姉夫婦の所へ行く旅行の計画の件で喧嘩になったり（#12）したことなど、夫婦にとって話し合いにならざるをえないような出来事が偶然続き、それらの出来事に対する両者の思いが面接場面でそれぞれ語られていった。しかし、それらの出来事が過ぎていくと、次第に夫婦面接について「あそこでは世間話をしているだけ」と

面接後に夫BがA子に語るようになり、夫Bの面接へのモチベーションは次第に低くなってきているようであった。その間、A子の体調は胃痛などを中心に悪い状態が続いていた。#14は、A子との個人面接であったが「主人が『なぜ僕がFセンターに行くのか分からない。あそこに行って僕に何を求められているのか分からない。精神的に病んでいるのは君だろ?!』と言っています」と報告する一方で「でも……夫婦カウンセリングを始めてから、以前に比べて主人がそんなふうに私を責めることは少なくなったと思います。そんな変化を主人は気づいていないんです」とA子が述べる。A子はカウンセリングによる夫婦関係の変化を感じ始めているが、夫Bはそれを評価せず、夫婦面接の継続に抵抗感がある様子。そこで、次の夫婦面接(#15)では「夫婦面接の意義・必要性」について話し合うことになった。

#15の冒頭には、夫Bが「この状態は妻の過去の育てられ方が原因」という話を始める。その話にThがじっくりと一通り傾聴した後、くなるほど、ご主人のお考えはよくわかりました。「育てられ方」という点を原因と考えて分析していくことは、一つの重要な考え方です。ただ……実は最近の心理学の考えでは、過去の分析より現在の「システム」の分析をした方が、早く効果があると言われていんです。こちらの理論の方がお二人にとって、より早くお役に立つと思うんですが……」と述べ始めて、Thが「夫婦関係システム」というものを変えることによって「症状が改善する」という説明を始めたところ、夫Bは「ほう、システムですか……」と興味深そうに身を乗り出す。A子の方は、キョトンとした顔。Thは「ここは、夫Bにまずはジョイニング。A子ごめんなさい……」と内思いながら、「システム(のよなもの?)」についての説明を続けていった。結局、この面接の最後の方では「いや～ここでの夫婦カウンセリングする意義がよく分かりました」と夫Bは納得した表情をしながら述べ、次回以降も夫婦面接に協力することを約束する。A子の方は(システムとやらの)理屈には納得はしていないが、夫が夫婦面接を続けてくれることには安心したような表情であった。その直後の#16

(A子個人面接)では、まずThが前回の面接について「いや～前回はご主人中心にお話をしてしまつて……申し訳ありません」と切り出したところ、A子は「面接後の帰り道で、主人は『なるほどシステムね～最近の心理学はどんどん進歩しているんだね～』と納得しておりました。でも、システムの話について主人は理解したと思うが、忘れっぽいところがあるので……主人の考え方や感じ方まで変わるかどうか……」と述べた。A子もまた夫婦面接によるA子自身の変化よりも、夫B自身の変化の方に期待が高いことが窺われた。この面接後、「価値観が違うA子と夫Bの両方とも乗せられるような、この夫婦の“風通し”をよくしていくための工夫が、今後の夫婦面接では何か一つ必要だ」という感触をThは強く持った。

### 【第3期】「夫婦テーマ面接」の導入

#20(X+1年2月)～#63(X+2年12月)

この頃は「夫Bにもっと語ってもらえるような工夫をすれば、元々語りのうまい妻A子と語り合えるようになり、夫婦間対話が促進できるのではないか」「夫Bがきちんと語れることを重視する面接空間を創ることはできないか」などとThは思案していた。そして、夫婦間対話を促進する形の夫婦面接にするという目的で、#20にThから「テーマを決めて語り合う夫婦面接(テーマという“枠”や“キーワード”があるので、夫Bが話しやすい)」を実施することを提案する。それに対して夫婦ともに「おもしろそうですね」と賛同し、次回の#21までにお互いに「話し合いたいテーマ」を考えてくることにした。#21には、夫BとA子とThの三者がそれぞれ考えてきた「テーマ」を付き合わせ、次回以降の夫婦面接のテーマ候補を選定した。

#23(X+1年4月)より10回の予定で「テーマ面接」を開始。その間のテーマは「友人」「喧嘩」「すれ違い」「通じ合い」「自分と相手のこだわり」「両家の文化」「なぜ家庭を持つのか」「相手の親とどう関わっていくか」などであった。テーマの選択は、各回の終わりにし、「身近なもの」「話しやすいもの」から徐々に「少し抽象的なもの」「核的な話題」へと回を追ってなっていくようにテーマを三者で選んでいった。面接の

進め方としては、決められたテーマから連想することを各々話してもらった後、お互いの話に対してコメントし合うという手続きから、その後は自由に展開するという「分かち合い」の形式をとった。Thは夫婦間対話の「風通し」をよくしていくための介入として、夫BやA子の一方がThに向けて話をした後は、一方の相手の言葉を「なぞる」ようにして、もう一方に伝えるという「通訳者」の役割を最初はとりながら、少しでも夫婦間の会話が始まったら、早々にTh自身は一步引くようにも心がけた。そうすることで、会話の“風向き”が夫婦同士に向くようにゆっくりと変化していくのではないかと期待できた。

テーマ面接開始後の最初の頃は、夫Bは「友人、それはよいものです……（それ以上語らず）」といったような、Thとの一問一答式のような会話になりがちで、「分かち合い」という語り方に慣れない様子であった。しかし、A子の語りやそのThの「なぞり」を聞いていたり、A子とThが夫Bにいくつか質問を重ねていくことにより、次第に夫Bは自分の思いをスムーズに語れるようになっていった。テーマ面接4回目（#26）くらいには、Thが口をはさまない夫婦間での会話が面接中に何度も見られるようになり、だんだんと夫婦間の意見交換がスムーズになされていっているように思えた。一方で「たいぶ妻の体調がよくなりました」と夫BからA子の症状が軽快している（発作は起こらず、蕁麻疹も1～2回程度）ことが報告された。

8回目（#30）には、ショック症状の起因となった義母をめぐる対話がなされた。A子は「週1回はかかってくる義母からの電話にどう対処するか？」という具体的な例を挙げると、夫Bが「昼間は出なくていいよ。夜にかけるよう僕から母に話す。今はスポークスマンは僕かな？」〈それは、義母からの電話はご主人が対応するということ？〉「そう、私は『楯』になりますよ」（この話を聞いている間、A子は涙）。このような会話がなされながら「義母との各々の対応の工夫」について、いくつかのパターンが（特に夫Bの意見を十分に採り入れながら）夫婦間で考えられていった。

9回目（#31）には、A子がニコニコしながら「主人がTVを見ていると、私の話を全然聞かないんです」〈ほう～？〉「そうかな？ 君だってワイドショーには釘付けじゃないか」「そんなことないわよ」……（しばらく軽い言い争い）〈お二人ともホントTV好きなんですね～〉「そうですね（二人同時に笑）」といったような夫婦間の対話にThが少し“茶々を入れる”といった“ざっくばらん”な会話が展開するようになっていた。同セッションの最後には、「妻はだいぶ元気になってきました。蕁麻疹もまったく出なくなって体調もよさそうです」と夫Bから再びA子の体調の良好さが報告される。

最終回の10回目（#32：10月）には、テーマ面接についての「ふりかえり」が行われ、夫Bは「家でも会話の種類が増えたように思える。妻の考えがよく分かった」と感想を述べ、A子は「先生（Th）に立ち会ってもらくと、普段話しにくいことも話しやすくなるので、とてもよかった。ここで話し合ったことの延長戦が、家庭でもできたのもよかった」などと話す（この頃は、テーマ面接での話題が、その後の家での食事中などにも話されるようになっていた）。このセッションの最後に夫婦ともに（特に夫Bの方が積極的に）テーマ面接の継続を希望するが、Thはこの時点では「ずるずるとマンネリになるかも？」という感触があったので、〈一度、間を置いて状況を見ながら、また必要だと思ったなら始めませんか？〉と提案すると、夫婦とも「では、また必要だったら希望を出します」と述べて了承する。

その後も約2週に1回のA子との個人面接と月1回の夫婦面接は続けられたが、テーマ面接終了後、4カ月後に夫Bの方から再びテーマ面接再開の希望があったため、二度目の「夫婦テーマ面接」を実施した（#40～#63：X+2年4月～12月）。一度目よりスムーズな、そして「将来の計画」「子ども」「相手の死」など、より込み入った・深いテーマで、Thが立ち会いのもと、夫婦同士の意見交換がなされた。

【第4期】夫婦面接の継続、治療者の交代まで  
#64（X+2年12月）～#74（X+3年3月）

# 63で夫婦テーマ面接は一旦終了し、A子からも「夫婦間での対話がしやすくなったこと、お互いの性格の違いがはっきりしたこと、私自身が主人に対して言いたいことが言えるようになったこと」といったテーマ面接の効果が述べられた。この頃は、再び2週に1回のA子との個人面接と月1回程度の夫婦面接を併行して行うという構造になっていた。またこの頃には、解離・パニック症状は完全に消失し、蕁麻疹などのアレルギー症状もA子は「季節の変わり目やちょっと疲れが溜まったりすると、少し蕁麻疹が出てきたりします」と述べるような、日常生活で困らない程度まで軽減した。

この時期のA子との心理面接では、主にA子自身の過去（病歴）をじっくりと振り返るような話題が自然と取り上げられるようになり、A子の内省的なカウンセリング作業が始まっていった。24歳の頃のG市でH医大病院通院のために一人暮らしを始めた頃、発作が一番ひどかったこと、その時の医師も初めてのケースで迷っていた様子だったこと、2日に1回通院してそれ以外は英語学校に通っていたこと、31歳の時、母親に自分の精神的な思いを全部思い切って話したことが病気の改善には大きかったこと、主治医がE病院を絶賛していたので、上京するのは不安ではなかったこと等々話す。今までお世話になった医師の印象、またThにカウンセリングを受けたことで、20年前からは想像できないくらいとても体調も気持ちも楽になったことなども話す。そのような話を聴きながら「本当に苦勞されてきましたね～でも本当にここまで来られてよかったですね！」とThが言葉を返すと、A子は嬉しそうな表情で、今は夫Bと本当にうまくいっていると述べ、「複数の友人からも主人が変わったと言われたんですよ」と話した。また「あの私の父や母がいたから、今の自分たちがあるんだと主人とも話したんですよ」としみじみと語ったので、Thが「どういう意味ですか？」と聞き返すと、夫婦でお互いの家族を分析し合っ、その結果はお互いの親とお互いのパートナーがよく似ているということが分かって、納得し合ったとのこと。くなるほど、それはおもしろい発見ですね」と感心しながら、Th

には「もう十分に夫婦面接の場を提供しなくても、夫婦の間で“深い対話”ができていいるなあ」と実感できた。

X+3年2月にThの転勤が決まり、それをA子に伝えた直後は「カウンセリングも治療者交代ってあるんですね……」（以前の引っ越しでもあったようなThの交代は）少しショックな様子であった。その後、夫BとともにFセンターでのA子のカウンセリングの継続を確認し、新しいカウンセリング担当者との引き継ぎをした後、#74（X+3年3月）でThとの面接は終了となった。

### Ⅲ おわりに：この事例を通して考えたことと少しのまとめ

Th（以下、筆者）は、A子に対して「話しやすさ」を当初から感じていた。A子の話には筆者は十分共感できることが多かったし、会話の疎通感もよく、そのせいか、面接開始初期はA子へのジョイニングを心懸けながらも、A子の話の内容に少々巻き込まれ気味に話を聴いていたのかもしれない。A子との個人面接のみを続けても十分に対応できたのではないかと思う一方で、今から考えると、泥沼にはまってしまうような面接が展開する可能性もあった。このケースでは、問題の発生源から考えて、夫婦面接が必要とこの時には判断し、それを開始することになったが、そう考えると、結果的には治療プランとしてはこれでよかったのかもしれない。

また、実のところ、夫Bは筆者の苦手なタイプであった。それは夫婦面接を開始してから（当然のことであるが）はじめて分かったことであった（ちなみに筆者にとっての苦手なタイプとは、「ワンアップ・ポジション」を自然にとっている人である）。それゆえ、今このケースを振り返ってみると、夫婦面接の前半は、筆者がA子寄りの対応になりがちになり、結果的には夫Bへのジョイニング不足になってしまったのかもしれない。中盤は、そのジョイニング不足を取り戻そうと必死だったように思う。

恥ずかしながら、この夫婦システムにやっとジョイニングできたのは「テーマ面接」あたりであ

ろう。このケースの場合、「テーマ」を通して話し合うという形式の中で、夫婦と筆者との「間（あいだ）」が創られていき、同時に夫婦システムにジョイニングができるようになり、そこから治療展開していったのかもしれない。思い出してみると、その頃には筆者の中の夫Bに対する苦手意識は消失し、夫婦面接場面で夫Bの“理系的な論理的な意見”を聴くのがむしろ楽しみになっていたのを思い出す。また、夫婦間の緊張関係が面接場面で発生しても筆者が余裕を持って臨めるようになったのもこの頃であった。

それだけでなく、上記のケース報告では描ききれなかったが、テーマ面接の後半は「テーマ」という“おもちゃ”で、夫婦と筆者の3人が「一緒に遊んでいる」という感覚が（筆者の中では）確かにあった。これは、テーマ面接前の夫婦面接において筆者が「通訳者」的な役割だったのに対して、テーマ面接開始後の筆者は「協働者」的役割に変化していると筆者には感じられた。「テーマ」という三者の「間（あいだ）」にあるものによって、三者を「遊ばせる」空間が創られていったのだろうか？

この「間（あいだ）」は、いわゆる「外在化」とは違って、もともとA子や夫B（そして筆者）の中にあったものを外に出したのではなく、新たに面接場面において創出（構築）されたものである。筆者は、個々のケースに応じてさまざまな「間（あいだ）」が、面接場面でオーダーメイド的に創られていくものと今は考えている（「テーマ」はそのさまざまなものの一つに過ぎない）。

結果的に、このケースを通して筆者に与えられた課題の一つは、上述したような家族面接において繰り広げられる「間（あいだ）」の創出とその活用をしっかりとみつめていきなさい、そしてそのことを考えて続けていきなさい、ということかな？……と単純な考えではあるが、今のところは思っている。

このケースの夫婦は、夏と冬に二人で温泉旅行に行くことが恒例の楽しみであった。今もどこかの温泉で、夫婦の「間（あいだ）の対話」を楽しんでいるだろうか。もしそうであったならば、一緒に昔「間（あいだ）」で遊べた仲間の一人として、ささやかな喜びを感じることができそうである。